主催／福岡市、公益財団法人よかトピア記念国際財団
後援／外務省
　　文化庁

第22回　福岡アジア文化賞 報告書

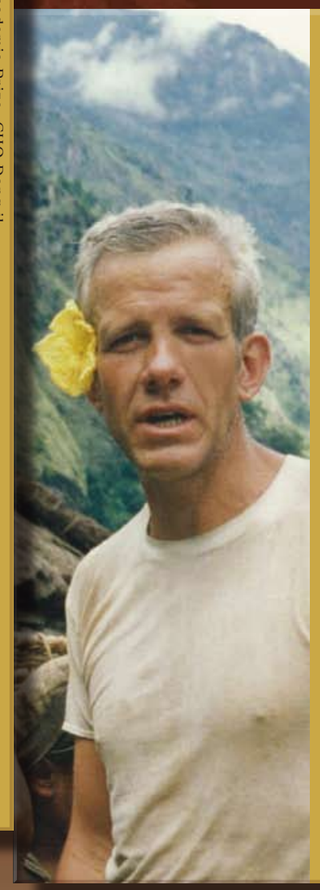
発行／福岡アジア文化賞委員会事務局
〒810-8620　福岡市中央区天神1-8-1　福岡市総務企画局国際部内
e-mail acprize@gol.com
http://www.asianmonth.com/prize

第22回 福岡アジア文化賞
FUKUOKA PRIZE 2011

報　告　書

Grand Prize　ANG Choulean
大賞　アン・チュリアン
民族学者・クメール研究者（カンボジア）

Academic Prize　CHO Dong-il
学術研究賞　趙　東一（チョ・ドンイル）
文学者（韓国）



Arts and Culture Prize　Niels GUTSCHOW
芸術・文化賞　ニールズ・グッチョウ
建築史家・修復建築家（ドイツ）

FUKUOKA ASIAN MONTH

福岡アジア文化賞の受賞者

= 創設特別賞　= 大賞　= 学術研究賞　= 芸術・文化賞

★福岡

日本
- 第1回 黒澤 明（映画監督）
- 第1回 矢野 暢（社会科学者）
- 第2回 中根 千枝（社会人類学者）
- 第3回 竹内 實（中国研究者）
- 第4回 川喜田 二郎（民族地理学者）
- 第5回 石井 米雄（東南アジア研究者）
- 第6回 辛島 昇（歴史学者）
- 第7回 衞藤 瀋吉（国際関係研究者）
- 第8回 樋口 隆康（考古学者）
- 第9回 上田 正昭（歴史学者）
- 第10回 大林 太良（民族学者）
- 第12回 速水 佑次郎（経済学者）
- 第14回 外間 守善（沖縄学者）
- 第17回 濱下 武志（歴史学者）
- 第20回 三木 稔（作曲家）
- 第21回 毛里 和子（現代中国研究者）

モンゴル
- 第4回 ナムジリン・ノロゥバンザト（声楽家）
- 第17回 シャグダリン・ビラ（歴史学者）

ネパール
- 第15回 ラーム・ダヤル・ラケーシュ（民俗文化研究者）

中国
- 第1回 巴 金（作家）
- 第4回 費 孝 通（社会学・人類学者）
- 第7回 王 仲 殊（考古学者）
- 第13回 張 芸 謀（映画監督）
- 第14回 徐 冰（アーティスト）
- 第15回 厲 以 寧（経済学者）
- 第17回 莫 言（作家）
- 第20回 蔡 國 強（現代美術家）

パキスタン
- 第7回 ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン（カッワーリー歌手）
- 第17回 アクシ・ムフティ（民俗文化保存専門家）

韓国
- 第3回 金 元 龍（考古学者）
- 第6回 韓 基 彦（教育学者）
- 第8回 林 権 澤（映画監督）
- 第9回 李 基 文（言語学者）
- 第16回 任 東 権（民俗学者）
- 第18回 金 德 洙（伝統芸能家）
- 第21回 黄 秉 冀（音楽家）
- 第22回 趙 東 一（文学者）

第22回学術研究賞受賞者
趙 東 一

香港
- 第19回 アン・ホイ（映画監督）

ブータン
- 第16回 タシ・ノルブ（伝統音楽家）

インド
- 第2回 ラヴィ・シャンカール（音楽家・シタール奏者）
- 第5回 パドマー・スブラマニヤム（舞踊家）
- 第8回 ロミラ・ターパル（歴史学者）
- 第15回 アムジャッド・アリ・カーン（サロード奏者）
- 第18回 アシシュ・ナンディ（社会・文明評論家）
- 第20回 パルタ・チャタジー（政治学・歴史学者）

台湾
- 第10回 侯 孝 賢（映画監督）
- 第18回 朱 銘（彫刻家）

ラオス
- 第16回 ドアンドゥアン・ブンニャウォン（織物研究家）

ミャンマー
- 第11回 タン・トゥン（歴史学者）
- 第16回 トー・カウン（図書館学者）

ベトナム
- 第7回 ファン・フイ・レ（歴史学者）

フィリピン
- 第3回 レアンドロ・V・ロクシン（建築家）
- 第12回 マリルー・ディアス＝アバヤ（映画監督）
- 第14回 レイナルド・C・イレート（歴史学者）

カンボジア
- 第8回 チェン・ポン（劇作家・芸術家）
- 第22回 アン・チュリアン（民族学者・クメール研究者）

第22回大賞受賞者
アン・チュリアン

スリランカ
- 第13回 キングスレー・M・デ・シルワ（歴史学者）
- 第15回 ローランド・シルワ（文化遺産保存建築家）
- 第19回 サヴィトリ・グナセーカラ（法学者）

バングラデシュ
- 第12回 ムハマド・ユヌス（経済学者）
- 第19回 フォリダ・パルビーン（音楽家）

マレーシア
- 第4回 ウンク・A・アジズ（経済学者）
- 第11回 ハムザ・アワン・アマット（影絵人形遣い）
- 第13回 ラット（マンガ家）
- 第19回 シャムスル・アムリ・バハルディーン（社会人類学者）

タイ
- 第1回 ククリット・プラモート（作家・政治家）
- 第5回 スパトラディット・ディッサクン（考古学・美術史学者）
- 第10回 ニティ・イヨウシーウォン（歴史学者）
- 第12回 タワン・ダッチャニー（画家）
- 第18回 シーサック・ワンリポードム（人類学・考古学者）

シンガポール
- 第10回 タン・ダウ（ビジュアルアーティスト）
- 第14回 ディック・リー（シンガーソングライター）
- 第21回 オン・ケンセン（舞台芸術家）

インドネシア
- 第2回 タウフィック・アブドゥラ（歴史学者・社会科学者）
- 第6回 クンチャラニングラット（文化人類学者）
- 第9回 R.M.スダルソノ（舞踊家・舞踊研究者）
- 第11回 プラムディヤ・アナンタ・トゥール（作家）

アジア以外の国・地域

イギリス
- 第1回 ジョゼフ・ニーダム（中国科学史研究者）

アメリカ
- 第2回 ドナルド・キーン（日本文学・文化研究者）
- 第3回 クリフォード・ギアツ（文化人類学者）
- 第6回 ナム・ジュン・パイク（ビデオアーティスト）
- 第9回 スタンレー・J・タンバイア（人類学者）
- 第21回 ジェームズ・C・スコット（政治学者・人類学者）

オーストラリア
- 第5回 王 賡 武（歴史学者）
- 第13回 アンソニー・リード（歴史学者）

アイルランド
- 第11回 ベネディクト・アンダーソン（政治学者）

フランス
- 第20回 オギュスタン・ベルク（文化地理学者）

ドイツ
- 第22回 ニールズ・グッチョウ（建築史家・修復建築家）

第22回芸術・文化賞受賞者
ニールズ・グッチョウ

CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者 …… 01・02
福岡アジア文化賞とは …… 03・04
第22回受賞者
　大賞　アン・チュリアン …… 05
　学術研究賞　趙東一（チョ・ドンイル） …… 06
　芸術・文化賞　ニールズ・グッチョウ …… 07
授賞式、祝賀会 …… 08～10
受賞者あいさつ …… 11・12
市民交流事業
　アン・チュリアン …… 13・14
　趙東一 …… 15・16
　ニールズ・グッチョウ …… 17・18
記者会見、広報活動 …… 19・20
歴代受賞者名鑑 …… 21～26

福岡アジア文化賞とは

福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバリゼーション時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990 年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を創設しました。以来、22 年間で 88 人の素晴らしい受賞者に賞を贈り、その広がりはアジアのほぼ全域にわたっています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

1. 目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2. 賞の内容

大　賞 賞金　¥5,000,000	アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体。
学術研究賞 賞金　¥3,000,000	人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体。 ※「学術研究」には歴史学、考古学、文化人類学、社会学、政治学、経済学などが含まれる
芸術・文化賞 賞金　¥3,000,000	アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体。 ※「芸術・文化」には美術、文芸、音楽、演劇、舞踊、映像、建築、伝統文化、民族文化などが含まれる

3. 対象圏域

東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4. 主催

福岡市、公益財団法人よかトピア記念国際財団

5. 運営・選考組織

（1）福岡アジア文化賞委員会

賞の運営母体として、審査委員会で決定した受賞者を承認します。

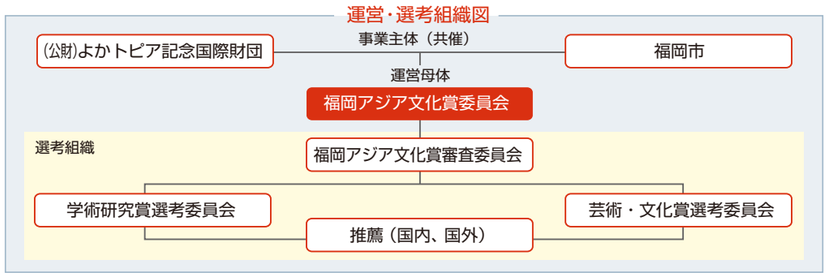
（2）福岡アジア文化賞審査委員会／学術研究賞選考委員会／芸術・文化賞選考委員会

各賞ごとに設けられた選考委員会で大賞および各賞受賞候補者を選考し、さらに各賞の選考委員長などで構成される審査委員会で総合的に審査し、受賞者を決定します。

（3）推薦依頼

広く候補者を募るため、国内外の教育・研究機関、芸術・文化団体、報道機関など7千人を超える関係者に、推薦を依頼しています。

運営・選考組織図



第22回福岡アジア文化賞のあゆみ

2009.07	54か国・地域約7,000人に第22回受賞候補者の推薦を依頼
2011.01～02	学術研究賞（1月30日）、芸術・文化賞（2月6日）各選考委員会にて、推薦された29か国・地域の受賞候補者253名・団体について選考
2011.03	審査委員会（4日）にて審査
2011.04	審査・選考合同委員会（29日）
2011.06	文化賞委員会にて3人の受賞者を承認し福岡記者会見で発表（7日）
2011.07～08	韓国（ソウル）記者会見（7月15日）、カンボジア（プノンペン）記者会見（8月6日）
2011.09	授賞式（15日）、学校訪問（16日）、市民フォーラム（17日、18日）、アジア文化サロン（16日、17日）
2011.11	ネパール（パタン）記者会見（13日）

第22回福岡アジア文化賞　審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会	福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞	福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞
委員長 **有川節夫** 九州大学総長 福岡アジア文化賞委員会副会長	委員長 **稲葉継雄** 九州大学大学院人間環境学研究院教授	委員長 **小西正捷** 立教大学名誉教授
副委員長 **山崎一樹** 福岡市副市長 福岡アジア文化賞委員会副会長	副委員長 **清水　展** 京都大学東南アジア研究所教授	副委員長 **藤原惠洋** 九州大学大学院芸術工学研究院教授
委員 **稲葉継雄** 九州大学大学院人間環境学研究院教授 学術研究賞選考委員会委員長	委員 **天児　慧** 早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科教授	委員 **石坂健治** 日本映画大学教授 東京国際映画祭アジア部門ディレクター
委員 **小西正捷** 立教大学名誉教授 芸術・文化賞選考委員会委員長	委員 **石澤良昭** 上智大学アジア人材養成研究センター 特任教授	委員 **後小路雅弘** 九州大学大学院人文科学研究院教授
委員 **清水　展** 京都大学東南アジア研究所教授 学術研究賞選考委員会副委員長	委員 **末廣　昭** 東京大学社会科学研究所教授	委員 **内野　儀** 東京大学大学院総合文化研究科教授
委員 **土屋直知** 株式会社正興電機製作所最高顧問	委員 **竹中千春** 立教大学法学部教授	委員 **宇戸清治** 東京外国語大学大学院 総合国際学研究院言語文化部門教授
委員 **西村篤子** 国際交流基金統括役	委員 **中村尚司** 龍谷大学研究フェロー	委員 **川村　湊** 法政大学国際文化学部教授
委員 **藤原惠洋** 九州大学大学院芸術工学研究院教授 芸術・文化賞選考委員会副委員長	委員 **新田栄治** 鹿児島大学法文学部教授	委員 **藤井知昭** 国際文化研究所所長

2011年12月現在

第22回 大賞受賞者 Grand Prize

アン・チュリアン
ANG Choulean

カンボジア／民族学

民族学者、クメール研究者
（カンボジア王立芸術大学考古学教授）

主な経歴

1949	カンボジア、コンポン・クレアンに生まれる
1974	カンボジア王立芸術大学卒業（考古学）
1982	フランス社会科学高等研究院博士号（民族学）
1990-	カンボジア王立芸術大学考古学部教授
1995-2001	国立アンコール地域遺跡保存機構（略称アプサラ機構）遺跡文化局長
2000-	カンボジア学術研究紀要『UDAYA（ウダヤ）』共同編集長
2004-	アプサラ機構総裁顧問
2005-	研究紀要「KhmeRenaissance（クメール・ルネッサンス）」（クメール語）共同編集長

主な著作

●『クメール民族の民間信仰における超自然の存在』（フランス語），パリ，クメール文化文書・研究センター（Cedoreck），1986.

●『アンコール―過去・現在・未来』（共著・共編）（英語），プノンペン，カンボジア政府，1996.［フランス語訳1997，クメール語訳1998］

●「初期バイヨン」『バイヨン―新しい視座』（英語），バンコク，リバーブックス，2007.

贈賞理由

アン・チュリアン氏はカンボジア人を代表する世界に知られた民族学者である。フランス留学後、内戦中のカンボジアに戻り、旧王立芸術大学の再開責任者となり、文化復興と遺跡の保存修復に尽力した。1992年ユネスコの世界遺産に登録されたアンコール遺跡群を担当する「アンコール地域遺跡保存機構（略称アプサラ機構）」の遺跡文化局長に就任し、破壊されたカンボジア文化の復興に尽くした。

1949年コンポン・クレアン生まれで、1974年王立芸術大学卒業後、フランス社会科学高等研究院に留学、民族学博士の学位を取得した。その研究手法は現地の風・太陽・雨で培われた民族感性に基づき、儀礼や生活文化等を手がかりに文化原像を浮かび上がらせ、再度組み立てなおすものである。カンボジア民族学の存在を文化人類学の文脈で読み込み、その起源・系統・固有性等を浮彫りにした功績は高く評価される。

アン氏の学位論文で代表的な著作『クメール民族の民間信仰における超自然の存在』（1986）は、カンボジア民族学の新境地を拓いた雄編として絶賛された。氏によれば、一般の民間信仰の儀礼は、アニミズム（精霊信仰）、かつてのヒンドゥー教及び大乗仏教、現代の上座仏教等のそれぞれが重層・渾融し、縦横にからむものである。例えば「籾米の山造り」の儀礼の中に小宇宙、時間と空間、豊饒が盛り込まれ混成されている。外から見ると仏教行事のように見られがちであるが、実はアニミズムと仏教が融合した儀礼であったりする。

上記のようなアン氏が切り拓いた地道で時間のかかる儀礼等の調査において、多くのカンボジア人若手研究者が参加し指導を受けている。このように、氏は1990年に再開された同芸術大学で教鞭をとるかたわら、創設期のアプサラ機構の局長となり、内戦後の混乱が続くさなかの遺跡保存責任者として、崩落の危機に直面する遺跡の救済をユネスコを通じ国際社会に呼びかけ倒壊を防ぐなど大きな実績をあげた。

アン氏は2005年から「クメール・ルネッサンス」の旗印のもとにクメール語による啓蒙活動に力点を移し、クメール文化と伝統を村人の日常生活の中に位置づけ、民族文化への覚醒を促している。氏は多くの国際シンポジウムに招聘され、固有で普遍的なカンボジア民族学のレゾン・デトルを世界の専門家に問いかけ、語り、発表している。

アン氏は民族学に挑み、多くの業績を積み上げただけでなく、祖国カンボジアの文化復興に貢献し、王立芸術大学の再開に尽力し、さらにアプサラ機構の創設と本格的な稼働、国際的枠組みづくりに大きな功績を残した。

以上のようなアン・チュリアン氏の功績は、まさに「福岡アジア文化賞―大賞」にふさわしい。

第22回 学術研究賞受賞者 Academic Prize

趙 東 一 チョ・ドンイル
CHO Dong-il

韓国／文学

文学者（ソウル大学校名誉教授）

主な経歴

1939	韓国慶尚北道英陽郡に生まれる
1968	ソウル大学校修士号（国語国文学）
1968-77	啓明大学国語・国文学科専任講師、副教授
1976	ソウル大学校博士号（国語国文学）
1977-81	嶺南大学校文科大学国語・国文学科副教授、教授
1981-87	韓国精神文化研究院韓国学大学院教授
1987-2004	ソウル大学校人文大学国語・国文学科副教授、教授
1994-95	東京大学客員教授
2004-	ソウル大学校名誉教授

主な著作

●『韓国文学通史』（全６巻）（韓国語），第４版，ソウル，知識産業社，2005.

●『東アジア文学史比較論』ソウル大学校出版部，1993.［日本語版：豊福健二訳，白帝社，2010.］

●『東アジア文明論』（韓国語）ソウル，知識産業社，2010.［日本語版：豊福健二訳，朋友書店，2011.］

贈賞理由

趙東一氏は、韓国を代表する国文学者である。主著『韓国文学通史』全６巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評される。のみならず氏の研究領域は漢字文化圏全域に及び、『東アジア文学史比較論』『東アジア文明論』などの著作によって比較文学・比較文明の研究者としても国際的に高く評価されている。

趙氏は、韓国の名門ソウル大学校の学部・大学院を修了し、文学博士の学位を得た。1968年以来約40年間啓明、嶺南、ソウル大学校の教授職にあり、この間、十指に余る韓国主要大学校や日本、中国、フランスの大学にも出講した。韓国大学の中堅及び若手研究者で氏の薫陶を受けなかった者は殆どいないと言われる所以である。

趙氏の研究は、韓国古代の口碑文学からスタートし、中世の漢文学・韓国古典から近代文学に及んだ。これらの成果を集大成したものが、1982年から88年にかけて上梓された『韓国文学通史』である。同書は、従来の政治史的区分ではなく、文化史的視点に基づく独自の時代区分を用いることによって韓国文学史の流れを連続的かつダイナミックに把握したこと、社会史・思想史を含めた人文学の総括的在りようを叙述したことで韓国文学研究史上大きな意義を有している。同書が東アジア出版人会議編『東アジア人文書100』（2011）に韓国代表26点のひとつとして収録されたのは、その意義が認められたからに他ならない。

『韓国文学通史』にも萌芽的な形で存在した比較文学史の視角は、1993年、『東アジア文学史比較論』として結実した。同書は、儒教並びに漢字文化圏に包摂される韓国、日本、中国、ベトナムの文学史を比較し、各国の独自性とともに普遍的な原理の認識に努めたもので、2010年に邦訳され、日本でも多くの読者を得ている。

趙氏はまた、若い頃から漢字・儒教・仏教を共有財産とする東アジア文明に関心を寄せ、特に講壇を離れた後はこの分野の研究に精力を注いできた。その成果が『東アジア文明論』（2010）で、同書において氏は、「東アジア学」「東アジア学問共同体」の構築に向けた積極的な姿勢を示している。

このように趙東一氏は、韓国文学のみならず東アジアの比較文学・比較文明に関しても多大な成果を挙げ、今もなお活発な活動を展開している。その貢献は、まさに「福岡アジア文化賞―学術研究賞」にふさわしい。

第22回 芸術・文化賞受賞者 Arts and Culture Prize

ニールズ・グッチョウ
Niels GUTSCHOW

ドイツ ／ 建築

建築史家、修復建築家
（ハイデルベルク大学先端研究拠点教授）

主な経歴

1941　ドイツ、ハンブルクに生まれる
1962,63　日本にて大工の見習い（犬山城、高野山金剛峯寺不動堂の再建に参加）
1970　ドイツ、ダルムシュタット工科大学（建築学）卒業
1971　ネパール、バクタプールにおける最初のドイツ・ネパール２国間保存プロジェクトメンバー
1973　ダルムシュタット工科大学博士号（建築学）（日本の城下町についての論文で博士号取得）
1980-96　ネパール（ゴルカ、ヌワコット、バクタプール、ムスタン、ムグ）にて広範な現地調査を実施（ドイツ研究振興協会助成プロジェクト）
1995　イコモスメンバーとしてパキスタンの世界遺産現地調査に参加
2007-　ハイデルベルク大学先端研究拠点「グローバルな文脈におけるアジアとヨーロッパ」教授
カトマンズ盆地保存トラスト（ニューヨーク）パタン王宮保存シニア・アドバイザー

主な著作

●『ネワール民族の町と建物―ネワール語・英語図解辞典』（共著）（英語）, ザンクト・アウグスティン,ヴィッセンシャフト出版社,1987.
●『ネパールのチャイティヤ―カトマンズ盆地における仏教奉納建造物の1500年』（英語）,シュトゥットガルト,アクセル・メンゲス社,1997.
●『ベナーレス―ワーラーナシーの聖なる景観』（英語）, シュトゥットガルト,アクセル・メンゲス社,2006.

贈賞理由

ニールズ・グッチョウ氏は、歴史的建造物の保存・修復と再生に対して建築史家・修復建築家として大きな貢献を果たしてきた。特にネパールやインド、パキスタンにおいて古建築や宗教建築の修復プログラムを進展させ、旧来の様式的観点のみならず、宗教儀礼や建築構法・細部意匠の分析と理解に立ち、学際的な保存の理論化と体系化を導いた。そこから未着手の宗教聖地や崩壊寸前の建造物までも修復対象として、保存を巡る理論と技法を大きく進展させ、日本や他のアジア諸国にも実践的な影響を与えてきている。

グッチョウ氏は1941年ハンブルクに生まれ、1962年から翌年にかけ大工見習いとして日本に滞在、犬山城や高野山金剛峯寺不動堂の再建現場で技術修練を得て独自の専門性の基礎を築いた。1970年にダルムシュタット工科大学建築学科を卒業、1971年以降、ドイツとネパール２国間で行われた最初の保存プロジェクトに参加し、美しい町並み保存と博物館都市づくりの先鞭をつけた。1973年に、日本の城下町に関する論文でダルムシュタット工科大学より博士号を取得。以降、黎明期のカトマンズ盆地の古都保存事業に参加する一方、建築と都市に関する比較研究を遂行した。

ネパールでの実践は、ドイツをはじめとする西欧の専門家がネパールの主要な歴史的都市遺産を実証的に踏査研究する契機となり、広くアジアの専門家との人的交流が進み、アジア特有の木造と煉瓦造建造物の保存修復を巡る研究と実践を先導した。氏が関わったカトマンズ盆地のバクタプール、カトマンズ、パタンの三つの古都におけるヒンドゥー教と仏教の建造物群は、1979年にアジアにおける最初のユネスコ世界遺産に登録された。

長年の実践に基づく知見と深い洞察に基づく保存修復の方法論は、建築史学のみならず宗教学、文化人類学等の隣接諸科学を包摂する豊かな学際性を有するようになった。インドのヒンドゥー教・仏教の聖地ワーラーナシー（ベナーレス）の宗教儀礼と都市空間の相互作用を建築人類学的な観点から追究した重要な研究書『ベナーレス』（2006）は代表的な成果である。さらに現代はハイデルベルク大学の先端研究拠点「グローバルな文脈におけるアジアとヨーロッパ」の教授として、学際諸学を巻き込みながら、建築と都市との相互作用に関する理論的考察と事例研究を深めている。

このようにニールズ・グッチョウ氏は、日本の大工技法や身体的実践の修得を端緒として南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を学際的な研究から高次の哲学的営為として昇華させ、建築遺産の包括的な価値創出を先導してきた。この貢献は、まさに「福岡アジア文化―芸術・文化賞」にふさわしい。

授　賞　式

日時／9月15日（木）　18:20～20:00
会場／福岡国際会議場　司会／檀ふみ

高島福岡市長による
主催者代表あいさつ

有川九州大学総長による
選考経過の報告

秋篠宮同妃両殿下の御臨席を賜り、市民や各国、各界関係者など約千人が参加し、福岡国際会議場で授賞式が開催され、受賞者の栄誉を称えました。

厳粛な雰囲気に包まれた第１部では、あでやかな和服姿の筑紫女学園大学アジア文化学科の学生にエスコートされながら受賞者が登壇し、主催者を代表して高島宗一郎福岡市長が、受賞者を祝福するあいさつ。秋篠宮殿下より受賞者及び福岡アジア文化賞についてお言葉をいただき、引き続き審査委員長の有川節夫九州大学総長より選考経過が報告されました。贈賞では、主催者の高島市長と鎌田迪貞よかトピア記念国際財団理事長より、博多織で装幀された賞状と福岡市の花“フヨウ”からデザインしたメダルが贈られました。

受賞者は、受賞の喜びや福岡市民へのメッセージを込めてそれぞれスピーチ。市民代表の大坪加奈子さんによるお祝いの言葉が贈られた後、福岡インターナショナルスクールの子どもたちから花束が贈呈され、盛大な拍手に包まれました。

第2部では、司会の女優・檀ふみさんと受賞者が和やかに対談。エンディングでは、カンボジアから来福した4人の演奏家による伝統音楽、クメールクラシックの特別演奏で受賞者を祝福し、幕を閉じました。

式 次 第

〈第１部〉
受賞者紹介
主催者代表あいさつ　福岡市長　髙島　宗一郎
お言葉　秋篠宮殿下
選考経過報告　福岡アジア文化賞審査委員会委員長　有川　節夫
贈賞　福岡市長　髙島　宗一郎
（公財）よかトピア記念国際財団理事長　鎌田　迪貞
受賞者あいさつ
市民代表お祝いの言葉

〈第２部〉
受賞者と檀ふみ氏との対談
特別演奏　クメールクラシック

賞状を贈る髙島福岡市長（上）と
鎌田よかトピア記念国際財団
理事長（右）

第22回福岡アジア文化賞授賞式　秋篠宮殿下お言葉

本日、福岡アジア文化賞の授賞式が開催されるにあたり、受賞される3名の方に心からお祝いを申し上げます。

近年、国際社会におけるグローバル化が急速に進展していく中、画一化された思考方法や生活様式が社会に広まりつつあります。その一方、多くの国や地域においては、それぞれが有する独自の文化や伝統を守り育てていくことに多大な努力を重ねてまいりました。アジアには、多様な自然環境や風土が創り出し、長い歴史の中で育まれてきた言語や民俗など、各地域固有の文化が息づいております。私もアジアの諸地域を度々訪れていますが、各地の文化に触れるたびに、その豊かさや深さに感銘を受け、それらの保存と将来への継承の大切さを感じております。

福岡アジア文化賞は、アジアにおける多様な文化の保存と継承、そして創造に寄与することを目的とするものであり、大変意義深いものであります。本日受賞される方々の優れた業績は、世界に対してアジアの文化の意義を広く示すとともに、社会全体で共有する人類の貴重な財産になるものと考えます。

終わりに、受賞される皆様に改めて敬意を表しますとともに、この福岡アジア文化賞を通じて、アジア諸地域に対する理解、そして国際社会の平和と友好がより一層促進されることを願い、私のあいさつといたします。

特別演奏　クメールクラシック

授賞式に花を添えるため、大賞のアン・チュリアン氏の母国カンボジアの伝統音楽であるクメールクラシックの演奏家４氏を招き、式典の最後に披露してもらいました。彼らは、アン氏が内戦中再開に尽力した王立芸術大学を卒業、王宮とともに来日するなどカンボジアでもトップクラスの実力者です。異国情緒たっぷりの調べに包まれた会場には、ゆったりとした時間が流れました。

【演奏者と楽器紹介】
左上／ビン・ソホール氏　スコーダイ、ロマネア（太鼓）：
ひざの上に大小の太鼓を置き、たたき分ける。
左下／ニル・シヌーン氏　ロニアット（木琴）：
竹でつくられた旋律打楽器。
木片が16本と21本の２タイプがあるが今回のは21本タイプ
右上／ケム・リティ氏　クロイ（竹笛）：
縦、横タイプがあり、今回は縦タイプ。高音域の音色がとても美しい。
右下／サイ・トラ氏　トロー（弦楽器）：
中国の二胡によく似た弦楽器。３本の弦からなり優雅な旋律を奏でる。

受賞者と檀ふみさんの対談

受賞者のトークに、会場は和やかな空気に包まれる

檀ふみさんによる司会

授賞式の第２部では、司会の女優・檀ふみさんと受賞者が対談。「旅行が好きで各地を巡ったことが自身の目を養うことになり、後の研究にも非常に役に立った。」と自身の研究の素地を紹介した趙氏。「ネパールに関する著書全３巻がちょうどスイスで出版されることになっているが、これで研究が完結したわけではない。今後もネパールの建築史、そして遺跡建造物保存の研究・執筆を続けていきたい。」と今後ますますの活躍が期待されるグッチョウ氏。この他、受賞者の生い立ちや現在の道に進んだきっかけ、大切にしている言葉などが話題となりました。対談は受賞者の素顔に迫りながら和やかに進み、時折会場から笑い声がこぼれました。

最後に大賞のアン氏から「日本はこれまでも幾多の困難を乗り越えてきた。福岡も大きな地震があったが復興を成し遂げた。悲惨なニュースに心が大変痛んだが、日本の力強い復興を信じている。」と東日本大震災に関して励ましのメッセージをいただきました。

祝　賀　会

アジアフォーカスより参加

授賞式後に各界関係者が集まって催された祝賀会は、在日カンボジア王国大使館のハオ・モニラット特命全権大使の乾杯のスピーチで始まり、終始和やかな雰囲気の中で進みました。

また、福岡アジアマンスの主要事業アジアフォーカス・福岡国際映画祭から、ベトナムのダオ・バー・ソン監督と女優のニャット・キム・アインさんにゲストとして参加いただき、会場は一段と華やぎました。

多くの参加者が受賞者を囲み、祝福と歓談の輪はとぎれることがありませんでした。

受賞者あいさつ

Grand Prize

Academic Prize

Arts and Culture Prize

他の人と知識や愛情を分かち合うということ

大　賞
アン・チュリアン

秋篠宮同妃両殿下、ご出席の皆様、本日の授賞式では非常に大きな感激に包まれることは分かっていました。

そうした思いをどうして抑えることができましょうか。福岡アジア文化賞を頂き、誠に名誉に思います。私と同じ思いを他の2人も抱いていることでしょう。

この賞はこれまでの私の活動の成果と意義を認めていただき授与されるものと伺っております。私が今よりも若かった頃、自分がしていることがどのような重要性を持つのだろうといったことはほとんど考えませんでした。これはごく自然なことだと思います。若い時は自分に対し、そうした哲学的な問いかけはめったにしないものです。自分がやらなければならないことをただ行うだけです。

しかしこの賞を受賞することが分かった時、私は審査委員会がその決定を下すに至った理由を色々と考えてみました。そして思い起こしてみると様々な活動の中で、多かれ少なかれある原則に従っていたように思えます。私は気付いておりませんでしたが、そうした原則に従っていたようです。それは一言で言うと、他の人と知識や愛情を分かち合うということです。

謹んで福岡アジア文化賞委員会に対し、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

東アジアの文化、学問共同体の構築

学術研究賞
趙 東 一

福岡アジア文化賞学術研究賞を受賞するにあたり深く感謝いたしますとともに、大変光栄に存じております。韓国文学から東アジア文学へと、そして東アジア文学から世界文学へと広がりながら、幅広い比較研究を行ってきた作業が評価されたと思われ、これまでの努力の甲斐があったと確信しています。

福岡は東アジアのどの地よりも開放的な気風を持っており、国際交流の中心としての役割を果たしてきた歴史があるため、福岡アジア文化賞を授与していると理解しております。

私の研究成果の集大成である『東アジア文明論』において、伝統社会の東アジア各国では、漢文の文章でやりとりをする通文、そして口頭語を使用する通語の二つの方法で交流したと言及し、通文の中心が北京であったなら通語の中心は博多であったということができる、と述べたことがあります。博多がすなわち福岡です。東アジアの通文と通語の来歴について総合的な、そして国際的な共同作業を進めるにあたり、福岡がリードしていただけることを期待しています。

これに関し言及した『東アジア文明論』の一節を挙げたいと思います。東アジアの各国は、規模、政治体制、そして経済状況などお互いに大きく違うため統合は難しい。政治や経済の統合を優先させるならば、実現が可能かどうか疑問である。政治・経済と区別される文化が、そして文化を対象とする学問が、先立って文化共同体、または学問共同体をつくることが実現可能かつ効果が大きい方法である、ということです。この本は最近、日本語に翻訳されました。私は福岡に来て、その翻訳本を初めて受け取りました。みなさんが関心を持ってくださることを願っております。ありがとうございました。

魅了してやまない儀礼の舞台としての都市

芸術・文化賞
ニールズ・グッチョウ

ハンブルクで過ごしたこども時代から、私は釈迦の八正道に従おうと努めてきました。その道は私が20歳のときに、インド、ネパール、ビルマ（ミャンマー）、そして日本へとついに導いてくれました。そうしてこの40年間、私はドイツとネパールにそれぞれ家をもち、多くの異文化経験をしてまいりました。

日本で大工として働いた経験を通じて、職人の技能の先天的な価値を称賛するようになりました。宮大工さんはただ単に職人であるだけではなく、芸術家であり国宝でさえあるのです。このような見方を経験することによって、その後、ネパールの大工やレンガ職人と協力関係を築くことができました。そして、正真正銘の本物として、何世代もの技能が刻み込まれている人の手が作ったものを、尊重するようになったのです。それらは、その土地固有の知識体系が反映されています。建造物の保存において、普遍的といわれている原則を押し付けることは、生きた文化的伝統を追い出しかねません。

本日、光栄にもこの賞をいただけるのも、ネパールの芸術家や職人のおかげです。寛大にも自分たちの豊かな経験を分かち合ってくれ、献身的に支えてくれました。この賞は、たえずアジアから学び、将来をかけて神聖な風景をたどって巡礼の旅に出た、ひとりのドイツ人建築家に名誉を与えてくださいました。私は、建築人類学を確立した建築家のグローバルネットワークの一員になりました。この学問分野が、建造環境を形成する際に、非物質的価値が与える影響を、歴史的に追跡し明らかにします。1968年の伊藤ていじ、神代雄一郎両氏の革命的文献から多くを学びました。海や風、祭やコミュニティ共同体に関する二人の思想によって、私は空間をそれまでとは違った方法で捉え描くことができるようになりました。

私を魅了してやまないのは儀礼の舞台としての都市です。文化的概念としての都市が生き残るためには、交通やショッピングモールだけではなく、それ以上のものを組み込まなければなりません。問題は、私たちがその場所に宿る神や精霊を復活させ、空間を活力みなぎる領域に変えることができるかどうかにあります。福岡市が近隣から学び、都市空間に、多義的なものを受け入れる容器に作り上げていかれることを願っております。

「民間信仰から見たアジアの稲作社会」
～カンボジアの村落から～

第22回 大賞受賞者

アン・チュリアン
ANG Choulean

カンボジア／民族学

開催日／2011年9月18日
会　場／アクロス福岡
　　地下2階イベントホール
参加者／300人

第1部　講演　カンボジアと日本に共通する精霊信仰の概念

カンボジアには、インドから宗教が入ってくる前から、人々に根付いている精霊信仰＝アニミズムがあります。ここでは、カンボジアのアニミズムとしてネアク・タ信仰について説明するとともに、日本のアニミズムといえる「神道」との共通点についてもみていきたいと思います。なお、この講演では便宜的に仏教、ヒンズー教について触れることは避けておきます。

最初にアンコール地域北西部にある村を紹介します。村の中心に見られる木製の支柱は、クメール語でプラプームといわれ、目には見えない村のコミュニティの土地、土のエネルギーを表象しています。村人はここで豊饒のための雨乞いの儀式などを行います。小さなこの支柱は村のエネルギーを具現化するもので、支柱に水を流しかける儀式は、村全体に雨をもたらすと考えられています。このような考え方はカンボジアの、特に農村の人々には強く根付いています。

次にアンコール地域北西部に限定せず、カンボジアに広く見られるネアク・タ信仰について紹介します。ネアク・タは、それぞれの村の守護霊で、二つのものが一つに合体するという意味があります。一つは、村の土地です。もっと広義で捉えれば家であったり、田んぼであったり、村の空間ともいえるでしょう。もう一つは男性という意味もあります。特定の人物ではなく、森を切り拓いて稲を作れるようにした村のパイオニア、ご先祖さまという存在です。ネアク・タは、時に木であったり石であったりして具現化されていますが、共通するのは稲作に強く関連して土地と人間との結び付きを表しているという点です。土地が豊饒にという思いが信仰と密接に関わっています。

日本のアニミズムともいえる神道とカンボジアのそれとを比べると、神官の存在など違いもありますが、見えない神という存在の抽象化など共通点があります。また、どちらも稲作文化と深い関連があります。例えば、神道の注連縄は稲わらでできていますし、伏見稲荷では稲苗を植える儀式がみられます。また、儀式にお酒を使う点も、よく似ています。ネアク・タの儀式では、各家庭から持ち寄った米でつくられたお酒をネアク・タに注いだ後、村人で分け合いますが、これは楽しむための飲酒ではなく、ネアク・タに近づくためのひとつのテクニック、やり方です。日本には御神酒がありますし、沖縄の竹富島でみられる御嶽（うたき）の儀式などをみると、お酒の使い方にも共通点がみられます。お酒を通じて神の世界に近づくのです。

カンボジアのネアク・タ信仰と日本の神道は、歴史のうえで直接的な関係はありませんが、おおむね同じタイプではないかと思います。お酒の使い方、神の抽象性が非常に似ています。日本人は神道の中で誕生し、亡くなると仏教で葬式をすると聞きました。カンボジアもそうですね。それ以外にも様々な共通点があると思いますので、これからも調査したいと思います。

学校訪問

実施日／9月16日　会場／福岡県立城南高校

約800人の生徒たちを前にして、「こんなに多くの方の前で話すのは初めてです」と嬉しそうに講演を始めたアン氏。フランス統治下の影響が残る中、母国語ではなくフランス語で教育を受けた自身の経験を紹介し、母国語で自国文化を学ぶことの意義を語り、自国の言語や文化にもっと敬意を払うべきだと訴えました。生徒との質疑応答では「私たちが未来のためにできることはなんでしょう」という問いに対し、「まずは自分自身を作りあげ固めること。そのひとつずつが国の力となるのです」と回答しました。そのほかカンボジアとフランスの文化、日本や民族学についてなど、生徒から多くの質問が寄せられました。

生徒の感想

- 自国の文化に誇りをもって大切にし、発信していかなければいけないと思いました。
- 日本をより理解し、もっと良くするために日本を一度離れ世界を学びたい。
- 日常では気付かない自身の恵まれた状況に気付かされ、今自分たちにできることをしっかりやっていきたい。

人々の心の中にある信仰を消すことはできない

対談

対談者／石澤 良昭
（上智大学アジア人材養成研究センター特任教授）

石澤氏　日本にもネアク・タ的なものがたくさんあります。違いもあれば、似ているところもあります。アジアの稲作文化に共通する部分もありますね。まず、ネアク・タの儀式は、どんなときに、どんな方法で誰がイニシアチブをとって始めるのでしょうか。

アン氏　神官のような人はおらず、村の人々の信頼を集めている年長の方等が選ばれます。これは、村の民主主義にも関係します。村の人々の賛同により選ばれるのです。法律のようなものではありませんが、村の民主主義のようなものが人々の間にあるのです。

石澤氏　長老にしても顔役にしても、普段は農業をしているわけですね。ネアク・タのために専従で職についているわけではないですね。

アン氏　彼らは普通の人です。ほとんどの場合は、組織的に決められているわけではなく、数年、僧侶の修業を受けた人などもいます。そういった人が尊敬を集めます。

石澤氏　村には、（仏教儀礼を司る）アチャーという人がいますね。その人とはどういう違いがありますか。

アン氏　多くの場合、アチャーを兼任していたりします。この場合、アチャーとしてではなく、アチャーがコミュニティーの中で尊敬されているのでネアク・タの儀式を執り行うのです。

石澤氏　次に、これだけ都市化が進むと、ネアク・タは都市の中でどんな存在なのでしょうか。

アン氏　ネアク・タはジャズコンサートのように即興でできます。決まりきった文言は必要ないのです。お経のようなものはありません。神官も必要ないわけです。そういったネアク・タの真髄は、村の領域を超えて都市にも及んでいると思います。

石澤氏　今起こっている自分にとって一番大切な、例えば牛を守って下さいとか病気を直して下さいとかそういうことを祈るわけですね。次の質問ですが、クメールルージュ時代に、カンボジアのネアク・タ信仰は迫害されたのでしょうか。

アン氏　クメールルージュの兵士はほとんどが農村の出身で、ネアク・タを信じていましたし、仏教を信じていました。しかし、政治的イデオロギーですべての信仰が禁止されました。仏教もヒンズー教もすべてです。あらゆる信仰に係る行為は禁止されました。そのような状況がしばらく続いたにも関わらず、なぜネアク・タ信仰が今も残っているのか。それは、人々の心の中にある信仰を消すことはできないからだと思います。

第2部　クメールクラシックをあなたに～

今回のために特別にカンボジアから招いたクメールクラシックの名手たちによる伝統音楽の演奏が披露されました。クメールの伝統音楽にはいくつかの種類があります。仏教寺院などで演奏されるものは「プンピアット」と呼ばれる合奏音楽。精霊信仰における祈りでは「プレーン・アラク」、結婚式では「プレーン・カー」。そして日常的な楽しみのために演奏される「モハオリー」などのアンサンブルがあり、使用される楽器も異なります。フォーラムではさまざまなジャンルの計18曲が披露されました。

VOICE

岩下真理さん（福岡市東区）、野田玲子さん（福岡県筑紫野市）

「カンボジアに興味があり、学生時代は現地へ5回ほど足を運びました。アン・チュリアンさんの講演では、農村の文化についてのお話が興味深かったです。伝統音楽の演奏も現地で聴いた音楽を思い出して、とても懐かしく感じました」

アジア文化サロン

実施日／9月17日　会場／九州大学

アン・チュリアン氏の文化サロンは、東南アジア学会の九州例会と共同開催で開かれ、立命館アジア太平洋大学の笹川秀夫准教授や研究者など約10人が参加しました。

アン氏は、遺跡に代表される有形の文化財と、地域住民の宗教文化という無形文化財との結びつきについて、研究者が扱う「真」の歴史だけが遺跡にまつわる歴史として重要なのではなく、地域住民にとっての遺跡、歴史を検討することが重要だと語りました。また、現代の儀礼やその建物を遺跡と対比しつつ論じ、考古学者、建築家、美術史家が遺跡を扱う場合、過去の説明に終始するのではなく、現在のカンボジアで何が起きているかを知ることも、重要であると力説されました。続けて、精霊信仰ネアク・タに関する儀礼が詳細に示され、稲作と儀礼の結びつきの説明とともに、ポル・ポト時代の断絶、近年の都市化や社会の変化によって、こうした儀礼が消滅しつつあることにも言及されました。

続いて参加者と、遺跡や文化財、観光などについて、近年のカンボジア政府や官公庁が抱く考えと、地域住民にとっての文化の違い、アイデンティティ形成の源であった稲作の将来などについて熱い議論が重ねられました。

「韓国文学から見た東アジア文明」

第22回 学術研究賞受賞者

趙 東 一（チョ・ドンイル）
CHO Dong－il
韓国／文学

開催日／2011年9月17日
会　場／アクロス福岡 地下2階イベントホール
参加者／220人

第1部　講演　漢文を「共同文語」として東アジアの共通理解を進めよう

長年の研究成果として『韓国文学通史』全6巻を2005年に完成させました。ここでは古代は口承文学の時代、中世は漢文学の時代、近代は民族語記録文学の時代と分けています。ある国にのみ通じる理論ではなく、どの国にも通じる法則を時代別に考察する、という観点から論じています。

漢文を使用している国は、中国、日本、韓国、ベトナムです。中国以外の国では「漢文」という用語の統一はできていますが、中国では漢代文、古文、文芸文、後漢語などさまざまな呼ばれ方をしています。ですから私は、漢文を「共同文語」と言い換えることを提案しています。漢文はラテン語、アラビア語、サンスクリット語と並んで世界4大共同文語といえます。東アジア各国は、儒教を共有の理念とし、漢文を政治的・文化的交流に利用することで、一つの文明圏を築きました。しかし漢文は文章で、一定の知識、教養が必要になります。民間レベルで互いに交流するためには、言葉として通じる「通語」が必要でした。

東アジアが一つになるための「通文」は国家的努力で可能ですが、「通語」は人々の交流の中から自然発生的に形成されていきます。中国と韓国は「通語」のための専門家を国が用意し、ベトナムでは中国との交渉を華僑に任せていましたが、日本では民間の商人がその役割を担いました。博多の商人はアジア各国を精力的に回り様々な言葉を学び「通語」を取得し発展させていったのです。つまり「通文」の中心が北京であるならば、「通語」の中心は博多といえます。

『韓国文学通史』の基本理念は、口承文学、漢文学、民族語記録文学を対等に扱い、それらの相互関係を解明するものですが、多くの国では、口承文学は文学史に含まれず、漢文学と民族語記録文学は平等には扱わない、というのが通例です。中国文学史においては、漢文学を主流に扱い、民族語記録文学は最近になるまで注目されることはありませんでした。

東アジア文明圏の中心を中国と考えるなら、韓国やベトナムが中間部、日本は周辺部と位置付けられます。共同文語文学は中心部で生まれ、周辺部へと伝わります。周辺部へ行けば行くほど漢文学の影響は薄れますが、逆に民族語記録文学の影響が大きく独自色が強くなるのです。

今、ヨーロッパ文明圏では東アジアを一つとしてみようという動きがあります。しかし現状をみると国の規模、歴史認識、経済格差などで不和が生じています。今こそ国家の境目を超え、共同体としてまとまらなければなりません。ヨーロッパやアメリカの研究者たちによる偏った検証に頼るのではなく、東アジアの人が自ら自分たちの内部を検証する必要があるのです。東アジア各国の研究者たちが東アジア文学史を漢文で書き、それぞれの国の言葉に置き換える作業に力を注がねばなりません。哲学史、宗教史、芸術史、民族史などを含めた東アジア文明史を相対的に叙述することが私の大きな目標です。

学校訪問　実施日／9月16日　会場／福岡県立修猷館高校

文学と美術について講演をした趙東一氏。もともと志していた絵画の道を諦め、大学から韓国文学の研究に取り組んだという自身の経験をもとに話を進めました。趙氏は「韓国文学の研究はシビアであり、普通とは違う努力が必要だ」と力を込め、プロフェッショナルについて語ります。その一方で趙氏は現在、アマチュアという立場で念願だった絵画創作にも没頭。プロという肩書きに縛られず、自由に表現できることの喜びを生徒たちに伝えました。

講演後は生徒との一問一答に対応します。美術が選べなかったことを後悔しているかという質問には「これからたくさん描けばいい。後悔の念はありません」と力強く回答。最後に「たくさん歩き、たくさん見てほしい。その機会を高校生の時から積極的に作ってください」とエールを送りました。

生徒の感想

受賞するまでの経歴にとても驚きました。今回の講演で将来について深く考えることができ、本当に良かったと思いました。また、先生の絵には東アジア文化の特徴がはっきり表れていて改めて素晴らしい文化だと思えました。

「フランス文学を学んだことや絵を描いていたことが韓国文学にも活かされた」というお話を聴き、色々な経験が次の挑戦につながるのだと思いました。私もこれからもっといろいろなことを経験したいと思いました。

パネルディスカッション

モデレーター／稲葉 継雄
（九州大学大学院人間環境学研究院教授）

パネリスト／伊藤 亜人
（早稲田大学アジア研究機構教授）

パネリスト／松原 孝俊
（九州大学韓国研究センター長）

日本と韓国、互いの長所を合わせて東アジアを一つに

稲葉氏　趙先生の文学史について、松原先生に分かりやすく解説していただきます。

松原氏　趙氏の基調講演における最重要キーワードは「共同文語」。いわゆる中国語で書かれた「漢文」のことです。中世において漢文を使用してきた中国、日本、韓国、ベトナムでは「漢文」のことを「共同文語」と言い換えましょうというのが趙氏の考え方です。そして、もう一つのキーワードが「通文と通語」。「通文」は漢文を使った文書のことで、外交文書などが多く集まった北京を「通文」の中心と捉えています。一方「通語」はコミュニケーションのための生きた言葉のことで、アジア各国を渡り歩いた博多商人が集まる博多を「通語」の中心としています。博多には12世紀、宋の人たちを中心とした中国系の商人が集まり、いわゆるチャイナタウンを形成していました。

松原　孝俊氏

伊藤氏　中心部、中間部、周辺部と分けておられますが、日本はどのくらい周辺部であるとお考えですか。私は、日本はかなり周辺にあたり、韓国は中間ではなく中心に近いと思います。東アジア文明圏は、漢文をはじめ非常に論理性の高い体系的な議論ができる言語を共有してきました。そして地域を越えた普遍的な価値世界へと広がってきたわけです。しかし、日本は、体系的論理の世界とは異なる次元で自らを体現してきました。

趙氏　文明は、古代に中心部で発生しましたが、古代から中世、近代へと移行する中で、徐々にその目を周辺部へと移行していきます。ちょうどヨーロッパでも、その中心がイタリアからイギリスへと移っていったように、先進が後進になり、後進が先進になるという新しい流れが起こりました。つまり、時代の移り変わりの中で、その都度中心部、中間部、周辺部は変わるのです。ですから、どこを基準にいつの時代かにもよりますので、どのくらい周辺部かとは一概にはいえないということです。

伊藤　亜人氏

伊藤氏　韓国と日本でそれぞれどのような特徴がありますか。

趙氏　韓国はとても理論的な思考をもっています。それは、ヨーロッパにおける中間部であるドイツにも当てはまります。理論的・体系的なのが中間部の特徴です。また、日本はとても緻密です。韓国と日本、それぞれの長所を持ち合わせて東アジアを一つにしていければいいと思います。

稲葉氏　韓国の若い人が漢字を読めなくなっていることについてどう思われますか。

趙氏　一般レベルでも学者レベルでも、漢文での伝達は必要です。それぞれの言語に翻訳する過程で本来の意味が歪曲されてしまう恐れがあります。そういう意味でも東アジア学問共同体をつくり、東アジアとして一つになるべきです。ヨーロッパ共同体の根幹が経済・政治なら、東アジア共同体は文明を中心とした共同体です。中でも学問を第一に、次に美術などの芸術を中心に据えるべきだと考えます。博多は釜山にも近いので、共同体の中心として十分機能する可能性を秘めていると思います。

稲葉　継雄氏

稲葉氏　今回の市民フォーラムを契機に東アジアにおける日本の位置付けということも改めて皆さんとともに考えていければと思います。

VOICE

「『共同文語』のように国を超え、共同単位で捉える発想はとても素晴らしいと感じました。それぞれの国で歴史的な背景は違いますが、きっと分かり合える部分はたくさんあると思います。あらためて資料を読み返して理解を深めたいです」
左から波多江さん（福岡市）、大﨑さん（福岡市）、塚﨑さん（福岡市）

アジア文化サロン　実施日／9月16日　会場／九州大学韓国研究センター

市民フォーラムでも登壇した松原教授や稲葉教授をはじめ、韓国研究者約15人が参加。「学問人生40年」と題して活発な意見交換が行われました。学問一筋の人生を軽妙洒脱に語りつつ、その40年に及ぶ研究生活で到達した見解が披露されました。参加した次世代アジア研究者に対しては、改めて異質性ではなく同質性を重視して、東アジア全体のコミュニケーション手段である漢文（通文）を共通語とする「東アジア学問共同体」の設立が提案されました。趙氏の唯一の息抜きは、教え子たちを帯同しソウル近郊を登山することです。頂上から下界を眺望する醍醐味は、マクロな視点で文化現象を研究する氏のユニークな発想へとつながっているようです。

市民フォーラム

建築保存修復から空間創造へ ～アジアの現場が育てたクリエイション～

第22回 芸術・文化賞受賞者

ニールズ・グッチョウ
Niels GUTSCHOW

ドイツ／建築

開催日／2011年9月17日
会　場／アクロス福岡
　　地下2階イベントホール
参加者／250人

講演　称賛すべきは、先祖代々受け継がれた匠の技

私の父はハンブルクの建築家でした。私が生まれたばかりの1942年、父が描いていたハンブルグの未来図は、大きなビルが立ち並ぶ輝かしいものでした。しかし、その後起こった戦争で美しい街は無惨に壊され、約3万人が亡くなりました。建築環境の弱さを目の当たりにし廃墟の中で育ったことが、建築を私の人生の一部分としました。建造物というのは、壊れていく運命だと感じたのでした。戦争の後、自分たちの未来を新たに模索する動きが始まりました。それは、残ったものを保存するだけでなく、失ったものを「再創造」しようという動きでした。歴史の喪失を補うには、失った一部を回復し、創造しなおさなければ取り戻せないのです。

大学で建築学を学び、1971年転機が訪れます。ネパール、バクタプールの歴史的建造物を保存・再生しようという「ドイツ・ネパール2国間保存プロジェクト」メンバーになったのです。首都カトマンズ、パタン、バクタプールは、中世以来の都市文化が今も生き続ける古都です。1934年に起こった地震で大きな被害を受け、多くのヒンズー教寺院などが崩壊していました。6カ月くらい滞在し、私はその魅力にとりつかれました。以来40年以上、ネパールとドイツを行き来する生活が続いています。

地震が多いネパールでは、いかに地震に耐えうる構造にするかが重要です。修復にあたって、地下4メートルの深さに掘り下げて基礎をつくり、鉄骨の柱を組みました。上層階に行けば見えない構造にしたのですが、ネパールの人はそれを嫌いました。そもそも、ネパールでは、寺院は古くなったら新しく建て直すというのが基本的な考えです。なぜなら、神に捧げる神聖な建物は、新しい方が良いという考えだからです。現地の技術者と、エンジニアリングを活用するかで意見が分かれ、何度も話し合いました。東西の考え方の違いです。そして、何が最適かは、ネパールの職人が一番分かっていました。毎日彼らと一緒にいることが、私の人生で多くのことを学ぶ、最も実りある時間だったと思います。保存・修復において重要なことは、大学で教えられた事や、国際憲章よりも、現地で先祖代々受け継がれた匠の技と知恵なのです。それを評価することが最も大切なことだと私は考えます。ネパールに40年近くいることで、現地にどのような儀式があるのか理解することができました。ネパールの職人仲間も大勢できました。重要なのは、専門家として関わるだけではなく、もっと感情的に、情緒的に関わらなければならないということです。そうすることで、より多くのことを学ぶことができるでしょう。

建築を学ぶ際、「建築は機能である」と教えられました。しかし、文化が違えば機能も違います。窓は開けるためにあるのでしょうか。いいえ、違います。象徴・表現の窓もあるのです。先入観を捨て、様々な文化を学び、理解することが大切ではないでしょうか。

学校訪問

実施日／9月16日　会場／福岡雙葉中学・高校

生徒約1,300人の拍手に迎えられ、グッチョウ氏が入場。生徒たちはドイツ語で「こんにちは」と挨拶し、和やかな雰囲気で始まりました。生徒による、流暢な英語とドイツ語の司会で進行されました。氏は、高校を卒業してからミャンマーへ行き僧の修行をしたり、日本で宮大工として修業をしたことなど、これまでの人生経験について話されました。広い世界を知ること、自分自身で経験することの重要性や、新しい世界に入ったら、徹底的にその世界を楽しむこと、人間同士の触れ合いの面白さを生徒たちに伝えました。「若い時に、色々な国をみてほしい。そこの土地に行ったら抵抗するのではなく、その土地のやり方をまずやってみることを若いときの経験は教えてくれた」と氏は話します。また、生徒から、建築の仕事でいちばん重要なことを尋ねられ、「信頼・謙虚さ、人にも仕事にも神にも敬意を払うこと」と答えました。

生徒の感想

自分の目で見て、自分の手で触れるというリアルな体験や、相手を知るにはじっくり話をすることが大事だと思いました。

先生の時間をいとわない心構えが、人生を豊かにしていくのだと思いました。

「自分で自分に限界をつくらない」という先生の言葉が胸に響きました。何か新しいもの・場所・環境を追求していきたい。

パネルディスカッション

コーディネーター／藤原 惠洋
（九州大学大学院芸術工学研究院教授）

パネリスト／稲葉 信子
（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授）

パネリスト／波多野 純
（日本工業大学生活環境デザイン学科教授）

何のための保存修復か

波多野　純氏

波多野氏　私は1978年から、カトマンズ・パタン・バクタプールの王宮建築の調査を始めました。その成果を現地に還元したいという思いが強くなり、1990年からパタンの仏教僧院イ・バハ・バヒの保存修復を始めました。崩壊寸前であった僧院でしたが、朝にはお参りの人が訪れ、小学校の教室として使われ、その側では主婦たちが洗濯をしています。夕方になると男たちが、将棋を始め、一日中使われていました。修復を始めた最初の3～4年はゲスト扱いでした。しかし一緒に汗を流し共に働くうちに現地の人にとけ込むことができました。現地の材料、現地の職人さん、現地の技術で仕事をしました。みなが忘れてしまった過去の失われた技術も復活しました。文化財として保存するための修復ではなく、今も現地の人の生活の中心となる建築として生き続けています。

現地の声に耳を傾ける

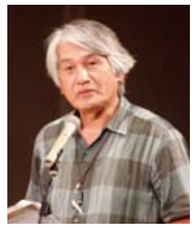
稲葉氏　日本ユネスコ国内委員会委員など文化財行政の立場で、世界遺産と関わってきました。その一つ、昔から東西の文明の交差路であるアフガニスタンのバーミヤーンについて話したいと思います。バーミヤーンは仏教の聖地として花開いた場所です。アフガン紛争の混乱や内戦が20年も続いた中、2001年、タリバンが大仏を破壊しました。世界遺産になった理由の一つに「2001年の悲劇を含む」とあります。イデオロギーの対立の証しも含め、今の状態で保存するという考えもあります。地元の人の中には、悲しい歴史を思い起こさせる廃墟のまま残したくはないので復元したい、という意見もあります。破壊された状態で保存するのか、それとも修復するのか。修復するにしても、どの時代まで遡って修復するのか。大切なことは、地元の人々がどうしたいかです。それに対してどの様な情報を提供できるかが、私たちの役割であり課題だと思います。

稲葉　信子氏

グッチョウ氏が考える保存修復

保存修復に当たっては、焦りは禁物です。何をやるにしても時間がかかるのですから、忍耐強くそのプロセスを受け入れることが大切です。アフガニスタンでは、再び内戦が始まるかもしれませんが、それでも待ちましょう。私たちが決めることではありません。ユネスコの本部が決めることでもありません。アフガニスタンの人々が決めることなのです。私たちはファシリテーターとして、あるいは資金的に貢献できるかもしれません。そして、バーミヤーンの大仏修復からではなく、周辺の石窟寺院の修復など小さなところから始めましょう。そのプロセスによって、地域にも理解を得られると思います。我々ができることから始めましょう。

藤原氏によるまとめ



藤原　惠洋氏

文化財だからということだけで保存・修復をしているのではなく、それを通して社会全体の再生を目指しています。グッチョウ氏は、専門家は保存・修復のプロセスに参加していくだけにすぎないとおっしゃっています。現地の人と共に汗を流し、現地の技で修復していくことが必要なのです。地元の人がどうしたいのかを知り、その実現に向けてどうコーディネートしていくのかが、保存・修復の専門家として最も重要な責務だと思います。

VOICE

「グッチョウ氏がおっしゃる『修復は創造的な仕事』という認識がもっと世界中に広まっていけばいいですね」松野尾仁美さん（福岡市博多区）、「伝統建築をどう残していくかという議論は興味深かったです。市民の視点と観光産業の視点から見る必要があると感じました」高倉貴子さん（大分県日田市）

アジア文化サロン

実施日／9月16日　会場／福岡市赤煉瓦文化館

明治時代に竣工した日本を代表する建造物を舞台に開かれた文化サロン。市民フォーラムでも登壇した稲葉信子氏、波多野純氏、建築及びまちづくり関係者、建築を専門とする学生約30人が集いました。日本の建築の先生方の本をたくさん読み、今の私があるとグッチョウ氏は話し始めました。「折れ曲がり」や「隅かけ」などの日本の技術や、空間や広場について大きく影響を受けた本について語ります。また、ネパールで、今も生活の一部としてある多くの儀式や祭りの例を上げながら、「都市空間とは、人類の活動の中から自然発祥的に小さな場所からできている。こうした活動の積み重ねが、その国・地域独特の都市景観をつくっていた。現代は、文化の概念を常に問いなおすことが求められ、それが我々にできる仕事だと思う。そうすることにより、都市の発達・創造への実現に導くことができる。保存とは何かと問いかける出発点にもなる。」と話されました。世界的・歴史的に重要な文化財である建造物を、どう残していくのか、世界遺産認定の経緯などを議題に、サロン終了後もエキサイティングなやりとりは続きました。

記者会見、広報活動

受賞者発表記者会見

6月7日に福岡市で受賞者発表記者会見を開催しました。髙島福岡市長より「9月には来福した受賞者と市民との交流を企画、楽しみに」とあいさつ、鎌田よかトピア記念国際財団理事長より3名の受賞者が発表されました。

続いて有川九州大学総長より、選考経過と贈賞理由の説明があり、石澤教授と藤原教授から各受賞者の業績や魅力について、分かりやすいようスライド等を使って解説が行われました。

【受賞者発表記者会見】
日　時：平成23年6月7日(火)　会場：西鉄グランドホテル（福岡市）
出席者：髙島　宗一郎　福岡市長（文化賞委員会名誉会長）
鎌田　迪貞　(公財)よかトピア記念国際財団理事長（文化賞委員会会長）
有川　節夫　九州大学総長（審査委員長）
石澤　良昭　上智大学教授（学術研究賞選考委員）
藤原　惠洋　九州大学教授（芸術・文化賞選考委員）

石澤良昭氏及び藤原惠洋氏による業績の説明

会場（受賞者作品のパネル展示）

海外記者会見

6月の受賞者発表を受け、それぞれの受賞者が活躍する地元で、受賞決定や受賞報告の記者会見を開催し、現地の政府機関や日本国大使館をはじめ、歴代の受賞者や現地メディアなど多くの参加をいただきました。

この海外記者会見では、福岡アジア文化賞の意義や受賞者の功績とともに福岡市を紹介し、その模様が各地で報道されました。

［報道件数］
国内　128件
国外　51件
計　179件
(2011年12月20日現在)

ANG Choulean

受賞者／アン・チュリアン
開催地／カンボジア（プノンペン）
開催日／8月6日（土）
場　所／在カンボジア日本国大使館ほか
参加者数／330人

［主な来賓・出席者］
ノロドム・シリウッド殿下
ヒム・チェム氏（カンボジア文化芸術大臣）
ボン・ソワット氏（カンボジア王立芸術大学学長）
黒木雅文氏（在カンボジア日本国大使館大使）
石澤良昭氏（上智大学教授）
※受賞記念講演会をプノンペン大学のカンボジア日本人材開発センターにて開催

CHO Dong-il

受賞者／趙 東 一（チョ・ドンイル）
開催地／韓国（ソウル）
開催日／7月15日（金）
場　所／ロッテホテルソウル
参加者数／50人

［主な来賓・出席者］
李基文氏（第9回大賞受賞者）
金徳洙氏（第18回芸術・文化賞受賞者）
鈴木浩氏（在大韓民国日本国大使館公報文化院院長）

Niels GUTSCHOW

受賞者／ニールズ・グッチョウ
開催地／ネパール（パタン）
開催日／11月13日（日）
場　所／パタン宮殿
参加者数／100人

［主な来賓・出席者］
サファルヤ・アマトゥヤ氏（ヘリテッジネパール理事長）
ビシュヌ・カーキ氏（ネパール政府考古局長官）
ラーム・ダヤル・ラケーシュ氏（第15回学術研究賞受賞者）
高橋邦夫氏（在ネパール日本国大使館大使）
藤原惠洋氏（九州大学教授）
※福岡での授賞式の模様を同会場にて報告

広報活動

受賞者情報を記載した報道用のプレスキット（日本語版・英語版）を作成し、国内外の記者会見などで配布しました。

授賞式や市民フォーラムへの参加を呼びかけるため、チラシを市役所情報プラザや区役所などで配布したほか、文化団体の所属会員に送付、文化講演会の来場者に直接配布、ポスターは地下鉄駅構内や大学、ホテルに掲示するなど、福岡市内外の各所で配布・掲示するとともに、新聞での告知を行いました。

また、市政だよりでの特集記事をはじめ、福岡市の広報テレビ番組や街頭モニターでの告知、市役所1階のアジアマンスギャラリーやデジタルサイネージを活用して広報を行いました。

さらに、受賞者発表や授賞式の様子などを、ホームページやメールマガジンを使って速やかに配信しました。

2011年チラシ(両面)

2011年ポスター(地下鉄駅構内)

デジタルサイネージ

アジアマンスギャラリー（福岡市役所1階）

ホームページ（メルマガ会員募集中）

アジア文化賞　検索

福岡アジア文化賞 歴代受賞者名鑑

FUKUOKA PRIZE Roll of Honor

第1回 1990

創設特別賞

巴　金
BA Jin
（中国／作家）●
『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

創設特別賞

黒澤　明
KUROSAWA Akira
（日本／映画監督）●
「羅生門」はじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

創設特別賞

ジョゼフ・ニーダム
Joseph NEEDHAM
（イギリス／中国科学史研究者）●
中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞

ククリット・プラモート
Kukrit PRAMOJ
（タイ／作家・政治家）●
大河小説「王朝年代記」ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞

矢野　暢
YANO Toru
（日本／社会科学者）●
日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回 1991

大　賞

ラヴィ・シャンカール
Ravi SHANKAR
（インド／音楽家・シタール奏者）
豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

学術研究賞

タウフィック・アブドゥラ
Taufik ABDULLAH
（インドネシア／歴史学者・社会科学者）
東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会科学者。

学術研究賞

中根　千枝
NAKANE Chie
（日本／社会人類学者）
アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、「タテ社会論」等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞

ドナルド・キーン
Donald KEENE
（アメリカ／日本文学・文化研究者）
大著「日本文学史」はじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

第3回 1992

大　賞

金　元　龍
KIM Won-yong
（韓国／考古学者）●
東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞

クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ
（アメリカ／文化人類学者）●
インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞

竹内　實
TAKEUCHI Minoru
（日本／中国研究者）
社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN
（フィリピン／建築家）●
東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

●は故人

第4回 1993

大　賞

費　孝　通
FEI Xiaotong
（中国／社会学・人類学者）●
中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞

ウンク・A・アジズ
Ungku A. AZIZ
（マレーシア／経済学者）
マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞

川喜田　二郎
KAWAKITA Jiro
（日本／民族地理学者）●
ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞

ナムジリン・ノロゥバンザト
NAMJILYN Norovbanzad
（モンゴル／声楽家）●
モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

第5回 1994

大　賞

スパトラディット・ディッサクン
M. C. Subhadradis DISKUL
（タイ／考古学・美術史学者）●
タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的位置づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞

王　賡　武
WANG Gungwu
（オーストラリア／歴史学者）
華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞

石井　米雄
ISHII Yoneo
（日本／東南アジア研究者）●
タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞

パドマー・スブラマニヤム
Padma SUBRAHMANYAM
（インド／舞踊家）
インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

第6回 1995

大　賞

クンチャラニングラット
KOENTJARANINGRAT
（インドネシア／文化人類学者）●
インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞

韓　基　彦
HAHN Ki-un
（韓国／教育学者）
独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞

辛島　昇
KARASHIMA Noboru
（日本／歴史学者）
刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞

ナム・ジュン・パイク
Nam June PAIK
（アメリカ／ビデオ・アーティスト）●
テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

第7回 1996

大　賞

王　仲　殊
WANG Zhongshu
（中国／考古学者）
古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞

ファン・フイ・レ
PHAN Huy Le
（ベトナム／歴史学者）
イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

学術研究賞

衞藤　瀋吉
ETO Shinkichi
（日本／国際関係研究者）●
中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン
Nusrat Fateh Ali KHAN
（パキスタン／カッワーリー歌手）●
イスラーム宗教歌謡カッワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

第8回 1997

大賞
チェン・ポン
CHHENG Phon
（カンボジア／劇作家・芸術家）
内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞
ロミラ・ターパル
Romila THAPAR
（インド／歴史学者）
独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞
樋口　隆康
HIGUCHI Takayasu
（日本／考古学者）
フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞
林　権　澤
IM Kwon-taek
（韓国／映画監督）
韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第9回 1998

大賞
李　基　文
LEE Ki-Moon
（韓国／言語学者）
韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞
スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH
（アメリカ／人類学者）
タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞
上田　正昭
UEDA Masaaki
（日本／歴史学者）
日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞
R.M.スダルソノ
R. M. Soedarsono
（インドネシア／舞踊家・舞踊研究者）
芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績をあげたインドネシアの代表的舞踊家。

第10回 1999

大賞
侯　孝　賢
HOU Hsiao Hsien
（台湾／映画監督）
厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て「悲情城市」などの名作を生んだ世界的な映画監督。

学術研究賞
大林　太良
OBAYASHI Taryo
（日本／民族学者）●
日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究の泰斗。

学術研究賞
ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG
（タイ／歴史学者）
斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

芸術・文化賞
タン・ダウ
TANG Da Wu
（シンガポール／ビジュアルアーティスト）
独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回 2000

大賞
プラムディヤ・アナンタ・トゥール
Pramoedya Ananta TOER
（インドネシア／作家）●
『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

学術研究賞
タン・トゥン
Than Tun
（ミャンマー／歴史学者）●
厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

学術研究賞
ベネディクト・アンダーソン
Benedict ANDERSON
（アイルランド／政治学者）
世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

芸術・文化賞
ハムザ・アワン・アマット
Hamzah Awang Amat
（マレーシア／影絵人形遣い）●
マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン（影絵人形遣い）。

第12回 2001

大賞
ムハマド・ユヌス
Muhammad YUNUS
（バングラデシュ／経済学者）
「グラミン銀行」を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

学術研究賞
速水　佑次郎
HAYAMI Yujiro
（日本／経済学者）
市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

芸術・文化賞
タワン・ダッチャニー
Thawan DUCHANEE
（タイ／画家）
タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

芸術・文化賞
マリルー・ディアス=アバヤ
Marilou DIAZ-ABAYA
（フィリピン／映画監督）
民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回 2002

大賞
張　芸　謀
ZHANG Yimou
（中国／映画監督）
現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

学術研究賞
キングスレー・M・デ・シルワ
Kingsley M. DE SILVA
（スリランカ／歴史学者）
スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

学術研究賞
アンソニー・リード
Anthony REID
（オーストラリア／歴史学者）
『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

芸術・文化賞
ラット
Lat
（マレーシア／マンガ家）
マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003

大賞
外間　守善
HOKOMA Shuzen
（日本／沖縄学者）
「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

学術研究賞
レイナルド・C・イレート
Reynaldo C. ILETO
（フィリピン／歴史学者）
東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

芸術・文化賞
徐　冰
XU Bing
（中国／アーティスト）
独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

芸術・文化賞
ディック・リー
Dick LEE
（シンガポール／シンガーソングライター）
シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回 2004

大賞
アムジャッド・アリ・カーン
Amjad Ali KHAN
（インド／サロード奏者）
インド古典弦楽器「サロード」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

学術研究賞
厲　以　寧
LI Yining
（中国／経済学者）
中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

学術研究賞
ラーム・ダヤル・ラケーシュ
Ram Dayal RAKESH
（ネパール／民俗文化研究者）
ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

芸術・文化賞
ローランド・シルワ
Roland SILVA
（スリランカ／文化遺産保存建築家）
イコモス（国際記念物遺跡会議）委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第16回 2005

大賞
任　東　権
IM Dong-kwon
（韓国／民俗学者）
韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

学術研究賞
トー・カウン
Thaw Kaung
（ミャンマー／図書館学者）
貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文献保存学の泰斗。

芸術・文化賞
ドアンドゥアン・ブンニャウォン
Douangdeuane BOUNYAVONG
（ラオス／織物研究家）
ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究家。

芸術・文化賞
タシ・ノルブ
Tashi Norbu
（ブータン／伝統音楽家）
ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

第17回 2006

大賞
莫　言
MO Yan
（中国／作家）
現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。

学術研究賞
シャグダリン・ビラ
Shagdaryn BIRA
（モンゴル／歴史学者）
世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

学術研究賞
濱下　武志
HAMASHITA Takeshi
（日本／歴史学者）
アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

芸術・文化賞
アクシ・ムフティ
Uxi MUFTI
（パキスタン／民俗文化保存専門家）
「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第18回 2007

大賞
アシシュ・ナンディ
Ashis NANDY
（インド／社会・文明評論家）
臨床心理学と社会学を統合させた独自の方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

学術研究賞
シーサック・ワンリポードム
Srisakra VALLIBHOTAMA
（タイ／人類学・考古学者）
関係諸学を総合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

芸術・文化賞
朱　銘
JU Ming
（台湾／彫刻家）
深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求める創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

芸術・文化賞
金　徳　洙
KIM Duk-soo
（韓国／伝統芸能家）
「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第19回 2008

大賞
アン・ホイ
Ann HUI
（香港／映画監督）
幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のパイオニア。

学術研究賞
サヴィトリ・グナセーカラ
Savitri GOONESEKERE
（スリランカ／法学者）
南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績をあげ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

学術研究賞
シャムスル・アムリ・バハルディーン
Shamsul Amri Baharuddin
（マレーシア／社会人類学者）
民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにいて一貫してリードする社会人類学者。

芸術・文化賞
フォリダ・パルビーン
Farida Parveen
（バングラデシュ／音楽家）
バングラデシュの伝統的な宗教歌謡バウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

第20回 2009

大賞
オギュスタン・ベルク
Augustin BERQUE
（フランス／文化地理学者）
欧日の人間社会と空間・景観・自然に対しての哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

学術研究賞
パルタ・チャタジー
Partha CHATTERJEE
（インド／政治学・歴史学者）
正統な歴史から振り落とされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきたインドの政治学者・歴史学者。

芸術・文化賞
三木　稔
MIKI Minoru
（日本／作曲家）●
邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。

芸術・文化賞
葵　國　強
CAI Guo-Qiang
（中国／現代美術家）
北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

第21回 2010

大賞
黄　秉　冀
HWANG Byung-ki
（韓国／音楽家）
韓国の伝統的楽器「伽倻琴（カヤグム）」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。

学術研究賞
ジェームズ・C・スコット
James C. SCOTT
（米国／政治学者・人類学者）
東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。

学術研究賞
毛里　和子
MORI Kazuko
（日本／現代中国研究者）
アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した、政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。

芸術・文化賞
オン・ケンセン
ONG Keng Sen
（シンガポール／舞台芸術家）
現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く。世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

福岡アジア文化賞委員会

※2011年9月現在

特別顧問	近藤　誠一	文化庁長官
〃	村田　直樹	外務省広報文化交流部長
〃	小川　　洋	福岡県知事
名誉会長	髙島 宗一郎	福岡市長
会　長	鎌田　迪貞	（公財）よかトピア記念国際財団理事長
副会長	有川　節夫	九州大学総長
〃	河部　浩幸	福岡商工会議所会頭
〃	森　　英鷹	福岡市議会議長
〃	山崎　一樹	福岡市副市長
監　事	石田　佳久	福岡市会計管理者
〃	本田　正寛	福岡市社会福祉協議会会長
委　員	青木　　秀	福岡文化連盟名誉顧問
〃	衛藤　卓也	福岡大学学長
〃	海老井 悦子	福岡県副知事
〃	遠藤　正雄	日本放送協会福岡放送局長
〃	大石　修二	福岡市議会副議長
〃	小川　弘毅	西部ガス株式会社代表取締役会長
委　員	喜多　悦子	日本赤十字九州国際看護大学学長
〃	斎藤　修一	日本経済新聞社専務執行役員西部支社代表
〃	佐藤　靖典	福岡市レクリエーション協会副会長
〃	新藤　恒男	株式会社西日本シティ銀行特別顧問
〃	滝本　　徹	九州経済産業局長
〃	多田　昭重	西日本新聞社相談役
〃	田中　浩二	九州旅客鉄道株式会社相談役
〃	玉木　良知	九州運輸局長
〃	佃　　亮二	株式会社福岡銀行相談役
〃	長尾　亜夫	西日本鉄道株式会社取締役会長
〃	橋田　紘一	株式会社九電工代表取締役社長
〃	原　　敏郎	毎日新聞社取締役西部本社代表福岡本部長
〃	弘中　喜通	読売新聞西部本社代表取締役社長
〃	水城　四郎	福岡市議会第1委員会委員長
〃	宮川　政明	朝日新聞社西部本社代表
〃	八尾坂　修	福岡市教育委員会委員長
〃	山本　盤男	九州産業大学学長
〃	G・W・バークレー	西南学院大学学長